View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

【作品】

光と陰のあいだに

— Between light and shade —

大田和 扶美奈
OTAWA, Fumina

①

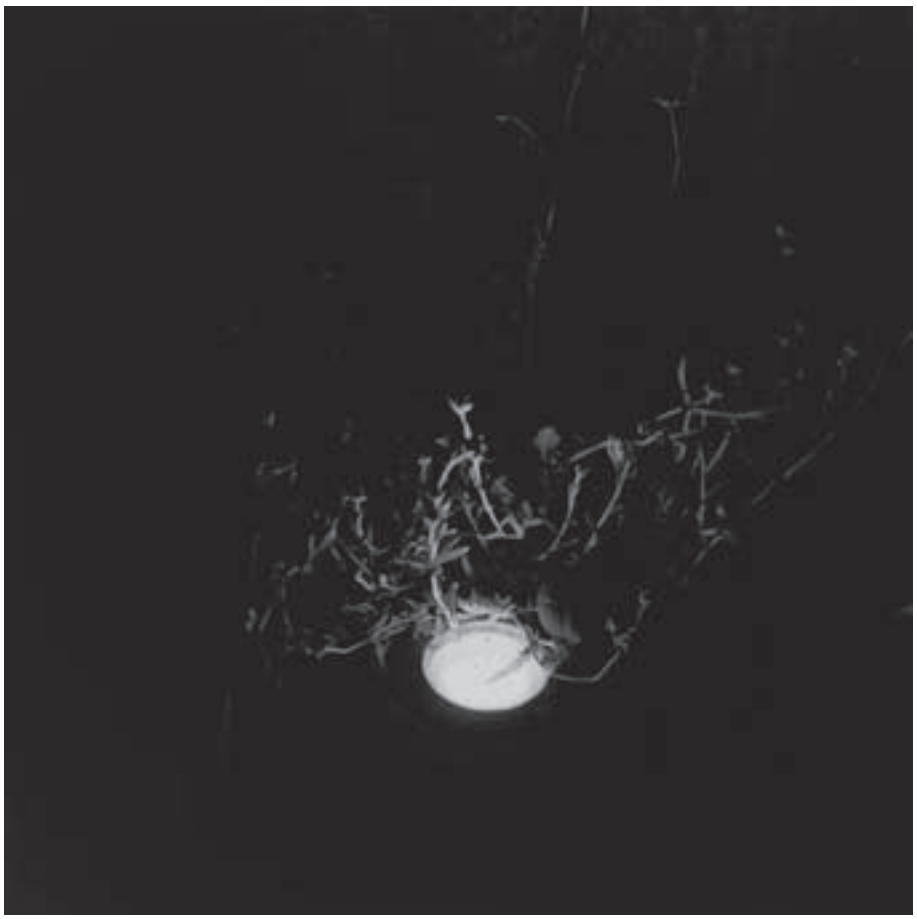
②

③

④

⑤

⑥



⑦

⑧

⑨

⑩

光の中に陰がある。
陰の中に光がある。
写真は光と陰で像を織り成す。

日陰の植物が光を求めてその芽を伸ばすように、
灼熱の太陽に照らされた動物が日陰を求めるように、
光の中だけでも、陰の中だけでも、生きるには苦しく、その“あいだ”でこそ
わたしたちは生きてゆけるのだろう。

この作品は、壮大で美しい幸福論といった類のものではなく、
「ただそこにあるものを受け入れる」
というテーマで制作した組写真である。
日中は陰を求め、闇夜には光を求めて撮影した。
生きてゆくということもこれに似ている。
光の差すところには必ず陰になる部分がある。そのどちらかに目が奪われがちであるが、実はわたしたちはその対局の間を彷徨っているだけなのではないだろうか。
白か黒か。白だけのものもなければ黒だけのものもない。
モノクロームの写真において大切なのは階調だ。そこに意図や表現が介入する場合は別として、通常は階調の美しい写真がよしとされる。白が真っ白く飛んでもいけないし、黒が救いようのないほど潰れてもいけない。その殆どをグレーの階調で再現するのが望ましいのだ。
わたしたちもまた、グレーの空間の中でただ同じ日々を繰り返す。
しかしグレーは素晴らしい。白と黒両方をその身に取り込んでいる。
白も黒も喜びも哀しみも包み込む、グレーの道を自己と対話しながら歩き続ける。
わたしたちはわたしたちでしかない。選択肢など存在しないである。

「わかりやすい」写真表現を目指しているため、被写体のモチーフとしては今回のタイトルのまま、
自然のもの、人工のもの問わず、光を追って制作を行った。
演出性は排除し、偶然によって形成されたありのままの事象を切り取ることで、また何の特徴もないありふれた日常を撮ることで、普遍的でそこに存在するしかないどうしようもなさをとらえることに努めた。

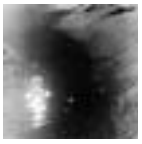
光と陰、朝と夜、白と黒、
その間に身を置き、答えのない行き来を繰り返し続けるわたしたちを慈しみ
陰に日向に
春に冬に
喜びに哀しみに
“あいだ”を彷徨いながら
像を織り成していきたい。

① 2009 年　ゼラチンシルバープリント　241.3 ㎜×241.3 ㎜　2009 年グループ展出品（cafe la siesta，京都）

② 2009 年　ゼラチンシルバープリント　241.3 ㎜×241.3 ㎜　2009 年グループ展出品（cafe la siesta，京都）

③ 2009 年　ゼラチンシルバープリント　241.3 ㎜×241.3 ㎜　未発表

④ 2009 年　ゼラチンシルバープリント　241.3 ㎜×241.3 ㎜　未発表

⑤  2009 年　ゼラチンシルバープリント　241.3 ㎜×241.3 ㎜　未発表

⑥ 2009 年　ゼラチンシルバープリント　241.3 ㎜×241.3 ㎜　2009 年グループ展出品（cafe la siesta，京都）

⑦ 2009 年　ゼラチンシルバープリント　241.3 ㎜×241.3 ㎜　2009 年グループ展出品（cafe la siesta，京都）

⑧ 2009 年　ゼラチンシルバープリント　241.3 ㎜×241.3 ㎜　未発表

⑨ 2009 年　ゼラチンシルバープリント　241.3 ㎜×241.3 ㎜　未発表

⑩ 2009 年　ゼラチンシルバープリント　241.3 ㎜×241.3 ㎜　2009 年グループ展出品（cafe la siesta，京都）